古都奈良の「おもてなし」景観シンポジウム

グローバル化による景観保存の方向性を探る

報　告　書

2015年２月

古都奈良の おもてなし景観シンポジウム 実行委員会

美しい景観の奈良
新たな保存と再生の時代が始まる

01 事業名称　　古都奈良の おもてなし景観シンポジウム
～グローバル化による景観保存の方向性を探る～

02 主　　催　　古都奈良の おもてなし景観シンポジウム 実行委員会
特定非営利活動法人奈良国際協力サポーター
公益社団法人奈良まちづくりセンター
公益社団法人日本建築家協会近畿支部奈良地域会
奈良市（都市整備部まちづくり指導室景観課）

03 後　　援　　奈良県、奈良県教育委員会、明日香村、橿原市、斑鳩町、吉野町、
奈良商工会議所、奈良デザイン協会、(特活)奈良 NPO センター、
JICA 関西、(公社)青年海外協力協会近畿支部、
(一社)日本建築学会近畿支部、(一社)奈良県建築士会、
㈱奈良新聞社、奈良テレビ放送㈱、㈱建設新報社

04 協　　賛　　一般財団法人奈良県ビジターズビューロー（看板支援）

05 助　　成　　地域づくり団体全国協議会 平成 26 年度地域づくり団体活動支援事業

06 実施日時　　平成 27 年２月１日（日）受付 13：00～ 開始 13：30～ 終了 17：00

07 開催場所　　日本聖公会奈良基督教会（昭和５年竣工・登録有形文化財）
奈良市登大路町 45（東向商店街・近鉄奈良駅から徒歩３分）

08 参加対象　　市民、学生、まちづくり・国際交流・国際協力・行政等関係者等

09 事業の経緯と目的

世界遺産を抱える歴史都市をはじめ、田畑や自然環境と共生する山里の風景は、人の営みの歴史との関係性により地域性豊かな風土を生み出し、現在においても維持している地域も多い。

しかし、人口減少による過疎化や空き家問題、乱れた建築景観や老朽化による文化資産の取り壊し、町並みの崩壊、新しい開発プロジェクトの計画等、今後ますます奈良が抱える問題は大きい。

古都保存法をはじめ、風致、景観地域、伝建地域、景観計画の策定等、景観行政が成熟してゆく中、市民による景観意識の醸成は進んでいるのでしょうか。法や条例の限界が現在の風景・景観を創っているとすれば、今一度まちづくりにより「人と人との関係性」にフィードバックし、市民による新たな風土を創造する基盤が必要なのかもしれません。

また、奈良を訪れる人々への「もてなし」を忘れるわけにはいきません。グローバル社会に向けた国際交流や国際協力、地域のまちづくり、地域性豊かな風土との関係性は、古都奈良をアピールできるインナーブランディングの再構築であり、非常に重要な要素と考えます。

本事業は、街並保全、自然環境や歴史的風土の保全を含む景観保存に関する世界の流れを、学際、国際協力・交流、行政、地域まちづくりの関係者を招き、市民と共に議論し、今後の奈良地域における風景・景観保存の方向性やまちづくりの在り方を模索する機会とします。

10 事業の概要

本事業は、海外と奈良の景観保存の手法を対比し、市民として景観保存での役割を認識し、まちづくりの関係性において、今後どのように実践できるかを問うシンポジウムとする。

開催日　　平成 27 年２月１日（日曜）
基調講演　　13：40～14：40（１時間）
講師・ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　　宗田好史氏（京都府立大学教授、日本イコモス国内委員会理事）
シンポジウム　14：50～16：50（２時間）
パネリスト　　頴原澄子氏（千葉大学准教授）
清水彬久氏（特活 アメニティ 2000 協会 理事長）
西山恵三氏（明日香村企画政策課 建築技術顧問）

１１ スケジュール計画

年　月　日	活　動　内　容	実施場所
平成２６年（2014） １０月	企画立案、事業承認	
	地域づくり団体協議会への助成申請	
１１～１２月	助成承認、事業準備、広報	
平成２７年（2015） ２月１日	景観シンポジウム　開催	日本聖公会奈良基督教会
２～３月	報告書作成、配布	

１２ 収支決算

収入の部

費　目	内　訳			数量	単位	単価	計
助成金	地域づくり団体協議会（奈良国際協力サポーター申請）			1	式	135,000	135,000
自己資金	JIA奈良地域会（近畿支部20,000＋地域会10,000）		2/1	1	式	30,000	30,000
自己資金	奈良まちづくりセンター		2/1	1	式	10,000	10,000
自己資金	奈良国際協力サポーター		2/1	1	式	10,000	10,000
収入						合計	185,000

支出の部

費　目	内　訳			数量	単位	単価	計
旅費交通費	講師　宗田好史氏　京都市⇔近鉄奈良	宗田	2/1	1	式	1,820	1,820
	パネリスト　頴原澄子氏　千葉市⇔近鉄奈良	頴原	2/1	1	式	30,140	30,140
	パネリスト　清水彬久氏　西宮市⇔近鉄奈良	清水	2/1	1	式	1,880	1,880
	パネリスト　西山恵三氏　飛鳥⇔近鉄奈良	西山	2/1	1	式	1,160	1,160
	事務打合せ等　大和高田⇔近鉄奈良　3往復	上嶋	2/14	6	回	490	2,940
	八木駅前駐車（橿原市　市民活動交流広場）	上嶋	2/14	1	回	150	150
						計	38,090
通信運搬費	後援依頼		11/13	1	式	480	480
	後援依頼		11/18	1	式	280	280
	後援依頼		11/21	1	式	560	560
	チラシ送付		12/20	1	式	3,000	3,000
	助成交付申請		2/10	1	式	140	140
	助成交付申請（当日資料送付）		2/12	1	式	400	400
	報告書送付（後援団体、講師）		2/15	1	式	5,085	5,085
						計	9,945
消耗品費	会議等に伴う消耗品		1/31	1	式	1,766	1,766
	コピー用紙		1/31	1	式	1,273	1,273
	講師打合せ会議に伴う消耗品		2/1	1	式	4,104	4,104
	封筒　B4サイズ5枚入×1、A4サイズ13枚入×2		2/14	3	袋	108	324
						計	7,467
印刷製本費	チラシ3000枚、ポスター50枚印刷（奈良市景観課）			1	式	－	－
	当日配布資料印刷（橿原市　市民活動交流広場）		1/31	1	式	4,100	4,100
	報告書印刷（橿原市　市民活動交流広場）		2/14	1	式	2,030	2,030
	講師・後援依頼、助成申請書類、報告書等コピー	上嶋	2/15	1	式	3,368	3,368
						計	9,498
使用料	奈良基督教会（本堂＋シオンホール会議室）		2/1	1	式	15,000	15,000
	ポット、お湯　（小尾二郎氏）		2/1	1	式	－	－
	プロジェクター、スクリーン（奈良市都市計画課）		2/1	1	式	－	－
						計	15,000
諸謝金	講師＋コーディネーター　宗田好史氏	宗田	2/1	1	式	40,000	40,000
	パネリスト　頴原澄子氏	頴原	2/1	1	式	20,000	20,000
	パネリスト　清水彬久氏	清水	2/1	1	式	20,000	20,000
	パネリスト　西山恵三氏	西山	2/1	1	式	20,000	20,000
						計	100,000
人件費	司会アルバイト　永井妙実氏	永井	2/1	1	式	5,000	5,000
	t						
						計	5,000
支出						合計	185,000

１３ 組織運営体制

■組織名称　　古都奈良の おもてなし景観シンポジウム 実行委員会

■実施団体　　（特活）奈良国際協力サポーター（Naicos）
　　奈良市あやめ池南 4-6-26　TEL　0742-87-1101
（公社）奈良まちづくりセンター（NMC）
　　奈良市中新屋町 2-1　TEL　0742-26-3476
（公社）日本建築家協会近畿支部奈良地域会（JIA 奈良）
　　奈良市大宮町 2-5-7　TEL　0742-33-3131
奈良市（都市整備部まちづくり指導室景観課）
　　奈良市二条大路南 1-1-1　TEL　0742-34-5209

■実行委員長　　島田 仁（奈良国際協力サポーター理事）

■実行委員　　Naicos：上嶋晴久、小尾二郎、田村亘
NMC：二十軒起夫、藤野正文、神野武美
JIA 奈良：森田昌司、勝村一郎、何左昌範
奈良市（都市整備部まちづくり指導室景観課）徳岡健治、佐々木伸夫
JICA 奈良デスク：永井妙実

■協力団体　　奈良デザイン協会、奈良県青年海外協力協会、地球市民フォーラムなら

■企画運営　　古都奈良の おもてなし景観シンポジウム実行委員会事務局
奈良市中新屋町 2-1　奈良まちづくりセンター内
TEL　0742-26-3476　FAX　0742-27-0969
担当責任者　上嶋晴久（JIA 奈良、NMC、Naicos）
TEL　0745-23-2245　携帯　090-9114-6969
Mail　hull@kcn.ne.jp

14 古都奈良の おもてなし景観シンポジウムの内容

2015 年２月１日（日）13：30～17：00

■開会

司会者の永井妙実氏（JICA 奈良デスク）より開会が告げられ、講演に先立ち、会場を提供いただいた日本聖公会奈良基督教会牧師の井田泉氏より挨拶と、昭和５年に建築、登録有形文化財の教会堂について説明があった。（別紙参照）続いて、主催者を代表して、本シンポジウム実行委員長（特定非営利活動法人奈良国際協力サポーター理事）の島田仁氏から開会の挨拶があった。

■基調講演

宗田好史氏による基調講演は、美しい景観の奈良ー新たな保存と再生の時代が始まる―と言う演題で行われた。古都奈良の未来として、今後の人口減少への対応、スマートシュリングの考え方の中で、奈良のスマートをどこに求めるのか。原点としての奈良公園の歴史から平城旧跡や明日香村の公園、歴史を思い馳せる景観形成の必要性。観光客の観光行動が、物見遊山から、体験型、滞在型に段階的進化する過程をヨーロッパの事例により紹介。奈良と京都との比較の中で、観光客が求める地域の魅力、町並み景観整備の必要性。美しく元気な地域づくりを今後求める方策として、さまざまな地域主体の取組、官民協働の取組、どんな街に住みたいかを考慮して、奈良の今後の景観まちづくりを進める必要性を語られた。

■シンポジウム

宗田好史による進行で進められ、最初に、３人のパネリストより各専門の立場から事例紹介があった。頴原澄子氏は英国ナショナルトラストの歴史や英国の文化財保存のシステム、日本との比較、ランドマークトラスト、エクスカーション等を紹介。清水彬久氏は自身が設立したアメニティ 2000 協会のナショナルトラスト精神による事業目的やヴォーリズ設計の六甲山荘の保存活動を紹介。西山恵三氏は奈良県が行った景観行政の概要説明があった。

シンポジウム議論内容：アメニティの考え方で英国と日本の差異として、英国では、あるべきものが、そのままの姿でそこにあることが重要であり、リフォーム後のオープンハウス等、景観保存への啓蒙活動も活発に行われている。英国では古いものは良いものとされているが、日本では必ずしもそうではない。古いものを残す思いはあるが、自らが率先するまで至っていないことが多い。奈良県も昭和の終わりころまでは、新しい開発優先だったが、近ごろはまちづくりコンシェルジュの活動もあり、まちづくりマップ等、地域の資産を見えるようにする事業が行われている。英国も 100 年前はとんでもない時代だった。ローマのサンピエトロ寺院周辺の中世の町並みを壊す計画もあった。1970 年頃は日本では団塊の世代が学生運動をした時代、新しいものを作ることが良い時代であって、英国の産業革命後の風潮と同じものが日本でもあったのかもしれない。反省として、ナショナルトラスト運動を行っている面がある。団塊の世代は現在、新しいものを欲しがらないほどの年齢に達していると言える。地域の歴史等の講義に熱心に参加する人が増えている。奈良では、考古学ファンの数が半端なく多い。奈良の歴史風土を守って行くために、風土にまつわる話をはじめ、年金や社会福祉、産業遺産、世界遺産の話や、炭鉱労働者の話が福祉を含む歴史文化として面白い。エクスカーションは観光が文化遺産を大切にする動きにつながる。ゆとりある余暇の過ごし方の為には働き方を変える必要がある。昭和 20 年代は７割の人が都会を目指していた時代、今は i ターンにより、ゆとりある暮らしを求める人が増えている。また、i ターンの人々を豊かにする術、若者が地域に来やすい環境整備が必要。相続税の免除も含め考える必要がある。アメニティ 2000

協会も認定 NPO 法人となった。いろんな人の力を借りて対応する必要がある。昭和 5 年建築の奈良基督教会等の戦前の建物は、戦後の 30 年経ったら建て替える前提で建てられた建物とは価値観が全く違う。若者に本当に良いものを与える事に意義がある。特定の人々に本当の伝統的なリサイクル文化を話す場は魅力的。

明日香村で現在行われている村民が取り組む大字景観計画の策定を紹介。伝統的な地域の事業やマナーを含め、地域の人々が話し合って行う景観まちづくり。地域からの動きが理想的、人材育成を産官学協働により行うのが良い。千葉大学では今井町での環境教育を毎年行っているが、現地で行う環境教育が大切。奈良の土産ではなく、顔の見える「ギフト」の感覚が良い。地域の住民が一体で行うまちづくりが必要。保存活用は、所有者だけではなく借り手との連携が大切。街として生き続ける事ができるようにする必要がある。住人が多少入れ替わっても生き続けられる街が良い。

会場から奈良市景観課担当者の発言やピーターラビット生家のナショナルトラスト活動等の質問を含め、活発な意見交換のシンポジウムとなった。

■閉会

閉会にあたり、主催者を代表して、本シンポジウム実行委員（公益社団法人奈良まちづくりセンター理事長）の二十軒起夫氏より、講師、パネリスト、シンポジウム参加者へのお礼と閉会の挨拶があった。

■成果

「古都奈良のおもてなし」と言う馴染みやすいテーマ設定と魅力的な講師、パネリスト、場所設定もあり、想定以上の１００名あまりの参加者を得た。共催した４団体に関係する話題でもあり、一般参加者と共に行政や大学、まちづくり、国際協力等の景観に関係する参加者も多く見られた。

宗田好史氏の講演では、日本の原点である奈良の景観を育むためには、人口減少に対応する新たな術が必要であり、観光との関係性、奈良本来の景観の在り方が何であるのかを踏まえた上で、今後の奈良の景観まちづくりを進めなければならない等、まことに印象的な講演であった。

シンポジウムでは、頴原澄子氏によるナショナルトラストの歴史や事例紹介や、清水彬久氏によるナショナルとラスト精神による自らのまちづくり活動から、市民自らが行動を起こす気概の必要性を認識することができた。また、西山恵三氏により明日香村の大字単位での景観意識の共有が報告され、景観について市民が取り組むべき方向性の認識を共有できたことは画期的であった。

シンポジウム議論では海外との比較から、戦後の日本が忘れた大切なものを今一度確認し、地域の良いもの、風土、環境を次世代に伝える努力が必要であり、その関係性の中で生き続ける街や田舎を育み地域を継承しなければならないことなど、本シンポジウムの目的である、風景・景観保存の方向性まちづくりの在り方を模索する好機を提供できたと考える。

参加者からは今回の景観シンポジウムに参加して本当に勉強になったという意見が多く聞かれ、ほぼ満足の行く形で実施できた。参加者による今後の展開が期待される。

古都奈良のおもてなし景観シンポジウム
プロジェクト事務局　　上嶋 晴久
（特定非営利活動法人奈良国際協力サポーター理事長）

■古都奈良のおもてなし景観シンポジウム記録写真

日本聖公会奈良基督教会牧師　井田泉氏の挨拶

実行委員長　島田仁氏の挨拶

基調講演　宗田好史氏

シンポジウム　宗田好史氏、顕原澄子氏、清水彬久氏、西山恵三氏

古都奈良の おもてなし景観 シンポジウム

平成27年 2月 1日（日曜日）

開場 13:00～　開始 13:30～　終了 17:00

日本聖公会奈良基督教会（東向商店街•近鉄奈良駅から徒歩3分）

昭和5年竣工•木造和風の教会•登録有形文化財

～ グローバル化による景観保存の方向性を探る ～

■基調講演　13：40 ～14：40　「美しい景観の奈良、新たな保存と再生の時代が始まる」
　◇講　師　　宗田好史氏（京都府立大学教授、日本イコモス国内委員会理事）

■パネルディスカッション　14：50～16：50
　◇コーディネーター　宗田好史氏
　◇パネリスト　　頴原澄子氏（千葉大学准教授）
　　清水彬久氏（特活 アメニティ2000協会）
　　西山恵三氏（明日香村 建築技術顧問）

■会　場　　日本聖公会奈良基督教会（奈良市登大路町45）
　※来場の際は、公共交通機関を利用ください。

■参　加　　100名（裏面の参加申込書により、事前受付）
　※当日受付可能ですが、満員時は入場制限有

入場無料

◆お問い合わせ◆
古都奈良の「おもてなし」景観シンポジウム実行委員会　事務局
奈良市中新屋町2-1　奈良まちづくりセンター内
TEL　0742-26-3476　FAX　0742-27-0969
E-mail　nmc@m4.kcn.ne.jp

主催　古都奈良の「おもてなし」景観シンポジウム実行委員会（下記4団体による協働開催）
　奈良市、(公社)奈良まちづくりセンター、(特活)奈良国際協力サポーター、(公社)日本建築家協会近畿支部奈良地域会
後援　奈良県、奈良県教育委員会、明日香村、橿原市、斑鳩町、吉野町、 JICA関西、(公社)青年海外協力協会近畿支部
　奈良商工会議所、奈良デザイン協会、(特活)奈良NPOセンター、(一社)日本建築学会近畿支部、(一社)奈良県建築士会
　㈱奈良新聞社、奈良テレビ放送㈱、㈱建設新報社
助成　地域づくり団体協議会　平成26年度地域づくり団体活動支援事業

古都奈良の おもてなし景観 シンポジウム　2015/2/1

わたしたち市民による景観意識の醸成は進んでいるのでしょうか。
　法や条例の限界が現在の風景・景観を創っているとすれば、今一度、「人と人との関係」に立ち返り、市民まちづくりによる新たな風土を創造する基盤が必要なのかもしれません。
　その結果、地域のブランド力「もてなし」景観が育まれることになりましょう。
今回の景観シンポジウムは、街並保全、自然環境や歴史的風土の保全に関する世界の先進事例を、専門家やまちづくり活動から学び、みんなで議論し、奈良の今後の風景・景観の方向性や、まちづくりの在り方を模索する機会とします。

基調講演・パネルディスカッション参加者プロフィール

宗田好史氏（むねた よしふみ）　京都府立大学 教授

法政大学工学部建築学科卒、同大学院を経て、イタリアピサ大学・ローマ大学大学院にて都市・地域計画学専攻、歴史的都市保存計画、景観計画、都市商業施策の研究。歴史都市再生施策の研究で工学博士（京都大学）。国連職員を経て現職。国際記念物遺産会議（ICOMOS）国内委員会理事、日本風景街道近畿地区研究会委員長、京都市景観審査会委員、東京文化財研究所客員研究員など。著作：にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり、京町家再生の論理、創造都市のための観光振興等多数。

頴原澄子氏（えばら すみこ）　千葉大学 准教授

東京大学文学部西洋史学科及び建築学科卒、同大学院博士課程修了（工学博士）
宮本忠長建築設計事務所、日本学術振興会特別研究員、武蔵大学・九州大学・山口大学等の非常勤講師、九州産業大学講師を経て現職。専門分野：建築史、建築保存。論文：第二次世界大戦期の英国における戦災建物の記録活動と廃墟保護の動きについて等多数、英国の保存運動や法律についての研究。所属：日本建築学会、日本建築家協会

清水彬久氏（しみず よしひさ）　(特活)アメニティ2000協会 理事長

英国で盛んなナショナル・トラストの考え方を柱とした環境の保全を目的とする「アメニティ2000協会」を設立。一般からの募金を基金に貴重な資産を保存していくナショナル・トラスト運動によりヴォーリズが設計した六甲山荘を購入し、一般公開・運営を行っている。神戸市の旧乾邸の保存運動をしたほか、文化遺産継承のための調査・啓発活動、ヴォーリズ建築のネットワークの推進、タイ・チェンマイYMCAの農業環境プログラム支援、海外のナショナル・トラスト団体との交流等、ナショナル・トラスト精神の普及活動に努めてきている。

西山恵三氏（にしやま けいぞう）　明日香村企画政策課 建築技術顧問

元奈良県職員、風致・景観課主幹、都市計画室長、建築課長を歴任、奈良県景観条例・景観計画の制定など、長年、風致・景観行政に関わる。県とNPO協働事業において、奈良デザイン協会や奈良まちづくりセンター等と協働して「県民景観学校」を開催。平成26年3月に県を退職し、現職。現在、明日香法をはじめ、古都保存法、明日香村風致地区条例、景観条例等により明日香村の景観・まちづくり行政を技術顧問として担当 。

参加ご希望の方は、本申込書をFAX　または申込み事項を記入したEメールを送信ください。

お申し込み先 （実行委員会事務局）　FAX　**0742-27-0969**　E-mail　**nmc@m4.kcn.ne.jp**

古都奈良の「おもてなし」景観シンポジウム　参加申込書			
お名前		参加者数	名
ご所属			
ご連絡先	電話　FAX E-mail		

※ご記入いただいた個人情報は、本シンポジウム以外の目的には一切使用いたしません。

日本聖公会 奈良基督教会礼拝堂について

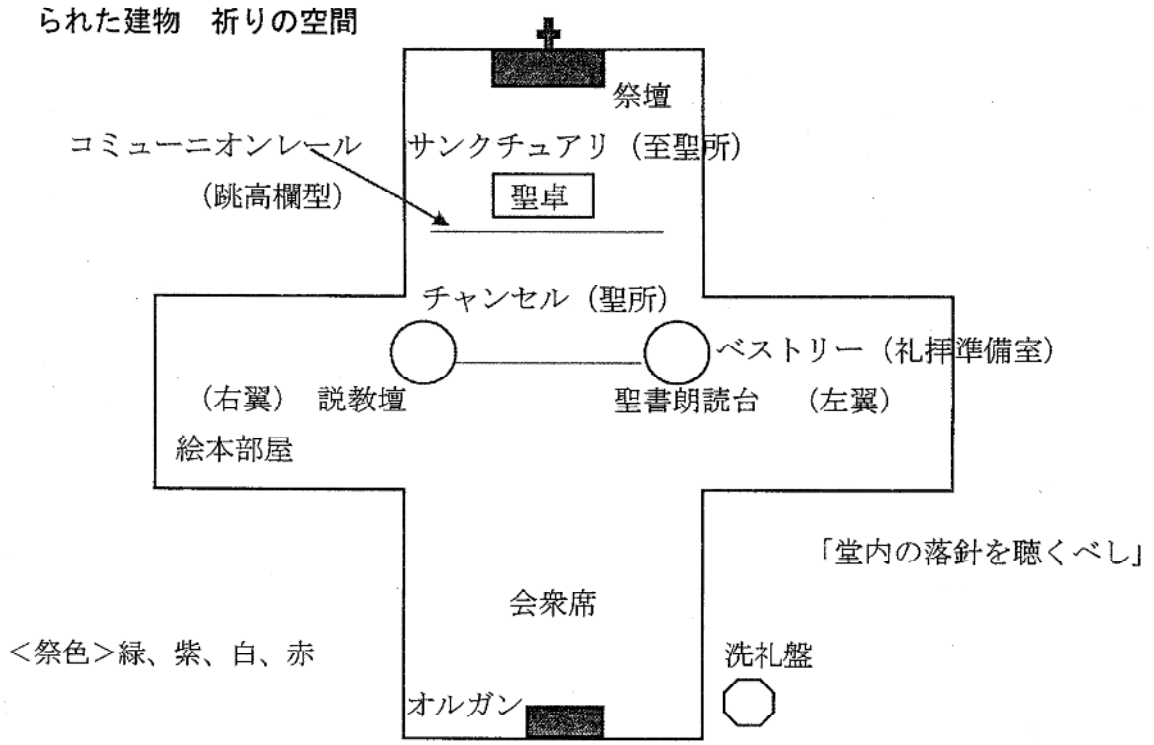
奈良基督教会　牧師　司祭　ヨハネ　井田　泉

1．**教会創立は 1887（明治 20）年**

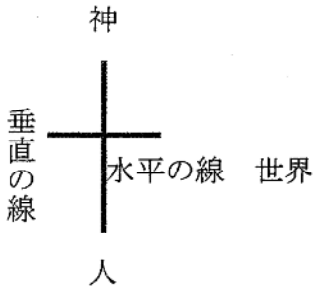
2．**現在の礼拝堂は 1930 年建築**　84 年の歴史　（国の登録有形文化財指定　1997 年）
1930「イクサ ナシ」　平和を願う祈りがこめられている。
奈良基督教会の信徒で宮大工の大木吉太郎氏による設計・施工。
主として吉野の 150～200 年の檜を選定して切り出し、用いた。欄間は教会で育てた桐材。

3．**和風の建築**であるとともに、**キリスト教の礼拝堂**としての特徴・性格を明確に備えている。
いにしえの奈良の文化とのつながりを感じさせる曲線（聖卓の脚、コミューニオンレール）。
聖書の世界とその周辺の世界の意匠、ドイツ製のパイプオルガン……多様な文化の共存・調和をイメージさせる。

4．**全体の形（上から見ると）は十字架**をなしている。**礼拝堂の目的——礼拝のために神に献げられた建物　祈りの空間**



5．**十字架**　イエス・キリストがわたしたちを招く姿
しっかり立ってわたしたちを支える姿
わたしたちの重荷を引き受ける姿
十字架は神と人を結び、人と人、世界を結ぶ



祭壇上のもの（十字架、花瓶、燭台）は七宝焼
中央にギリシア文字X（キー）とP（ロー）（ Χριστός キリスト から 2 文字）

祭壇上方には三つの十字架が見える（柱と梁）（ルカ 23:33）
左右の壁も十字架が並ぶ――イエスを中心として手をつないでいる人々

6．**祭壇・聖卓**　主イエスの最後の晩餐の食卓をかたどる。聖餐式（ミサ）は最後の晩餐の再現するものでキリスト教の中心的礼拝。

聖卓は「対面式」の聖餐式（司祭と会衆が食卓を囲んで対面する形）をするようになって設置したもの。教会の楠で製作。聖卓は意味の上で最重要。

7．**タペストリー**（ドッサル）祭壇背面　管１本ずつに織物を巻き付けてある
教会創立百周年（1987 年）の際にささげられたもの　川島織物製

8．**聖書朗読台・説教壇**
聖書朗読台は屋根の形
「わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。」マタイ 10:27

9．**祭色**　緑、白、赤、紫の４種　教会暦あるいは礼拝の意向によって決める

１０．**洗礼盤**
鳩　聖霊の象徴。主イエスが洗礼を受けられたとき、聖霊が鳩のように天から降ってきた。
神の小羊　傷を受けて世の罪を除く救い主イエス・キリストのシンボル。
波　世の荒波を渡っていく人生の航路。
八角形　四角形は人と世界を象徴し、円は完全なる神を示すとされる。八角形は人が神に引き寄せられて完全に近づいた形。山口県産の大理石。

１１．**パイプオルガン**　（中央の十字架は祭壇の十字架と呼応関係）
教会創立百周年（1987 年）の際にささげられたもの　ドイツ・ボッシュ社製
パイプの数は 1288 本。ストップは 19 本

１２．**リードオルガン**
1870（明治 3）年、アメリカ・キンボール社製。日本では現役最古のものと言われる。

１３．**竣工当初の教会の絵図**（南東の壁）

１４．**柱**　会衆席は角柱　チャンセルは丸柱（祭司エリを思わせる――サムエル記上 1:9）

１５．**格天井**（ごうてんじょう）　格子の形に組んでいる

１６．**鴨居・欄間**　教会の桐を使用

１７．**真壁**（しんかべ）　柱を露出させる方式

１８．**鬼瓦**　上に十字架、その下は２羽の鳩が向き合っている　**丸瓦**（端）には十字架

※聖公会は英国国教会の流れ。宗教改革により生まれたが、カトリックの伝統のいくつかを継承

2014/10/29

公益社団法人 奈良まちづくりセンター
月刊誌　町屋くん通信　2015年3月　305号より　文：神野武美　写真：清水和彦

「古都奈良のおもてなし景観シンポジウム」2月1日
市民の景観意識を育む戦略に4人のパネリストが熱弁

Nara Machizukuri Center Director
理事　神野武美

奈良市、奈良国際協力サポーター、日本建築家協会近畿支部奈良地域会とNMCの4団体主催の「古都奈良のおもてなし景観シンポジウム」が2月1日、木造和風の教会建築で知られる登録有形文化財「日本聖公会奈良基督教会」で開かれ、約100人が参加した。日本イコモス国内委員会理事で京都府立大教授の宗田好史さんが「美しい景観の奈良、新たな保存と再生の時代が始まる」という基調講演を行い、宗田さんをコーディネーターに、英国の建築保存に詳しい千葉大准教授の頴原澄子さん、阪神間の洋館の保存運動に取り組むNPO法人アメニティ2000協会理事長の清水彬久さん、元県庁職員で明日香村企画政策課建築技術顧問の西山恵三さんの3人がパネルディスカッションした。市民の景観意識を育むことが結果として地域のブランド力を高める、そんな地域戦略が浮き彫りになった。

●小さな店が多い『スロー・シティ』の魅力―宗田好史さん

基調講演をする宗田好史さん

基調講演で宗田さんは、奈良県も2040年に今の8割程度の約110万人、奈良市も同様に約29万人という人口減少が起こると推定する。しかし、奈良は、8世紀終盤に首都の地位を失うなど衰退の危機に何度も遭いながら、時代の変化にうまく対応し、都市として生き残ってきた「スマートシュリンク（賢い縮小）」の経験がある。その象徴が1880年開園の「奈良公園」。廃仏毀釈の影響で荒廃してもおかしくない状況にありながら、それらの土地を民間に払い下げたりせず、県が国から無償で借り、東大寺、興福寺、正倉院、奈良国立博物館などの歴史文化遺産が配置された美しい緑豊かな公園を実現させたのである。

それは、和の伝統と西洋風の公園を融合し、奈良の大きな魅力となった。

加えて、奈良町を「都市景観形成地区など30年にわたる奈良市の景観行政、とくにこの地域を住居系地域にした都市計画の成果」と高く評価した。京都市では、中心部の中京・下京が商業系地域になりマンションが林立し景観が破壊された。東京資本が進出した京都とは異なり、「奈良市中心部の奈良町は、自然食やクラフトなどを売る小さな店が多く、ムキムキのお金もうけではない『スロー・シティ』の魅力が溢れている」という。

奈良への旅行は従来、修学旅行で大仏や各寺社を回る「動物園型観光」が主流だったが、そうした奈良町の景色は「街を楽しみたい」という新しい旅行形態に対応できる大切な要素とみる。「一般市民がとても理解できそうもない美術品を見学するよりも、お店のおもてなしや、気に入った品物を買って帰る方が楽しいはず。観光客も『お土産品』より、多少値が張っても『私へのご褒美』や、『おしゃれなギフト』を求める傾向にある。そのためには奈良町の小さなお店の店先の景観がどうあるべきかを考えるべき」と訴えた。

それは「住みたい人」を増やすことにもつながる。宗田さんらが、奈良町を以前調査した時、学園前から奈良町に移り住んだ、ある会社の部長が「外国人を招くとき、学園前より奈良町の町家の方が喜ばれる」と述べたという。グローバルな視点で「町家を持つだけで尊敬される」。そんな時代の流れを認識することが必要ということである。

今後の課題は、広大な平城宮跡公園の景観という。平城宮跡は、市民の運動が近鉄の操車場建設計画を中止させた結果、特別史跡として保存されたが、「周辺地域を含めて奈良公園のような景観の美しい『至福のまち』にできるかが問われている」と話した。

●「社会のアメニティを向上させる力」－頴原澄子さん

パネル討議ではまず、頴原さんが、英国の景観や歴史的建造物の保存運動の歴史を紹介した。英国では、国が強制的に登録建造物をリスト化し約50万件に達する。それに対して日本では「所有者の意向」が尊重され、約1万2千件にとどまる。英国では「文化財には社会のアメニティを向上させる力がある」という認識が強く、政府だけでなく、ナショナル・トラストなどの民間団体や教会（英国国教会）がジェントリーの邸宅など歴史的建造物を取得するなどの保存活動に大きな役割を担う。

例えば、ナショナル・トラストは全年間収入約600億円のうち会費が280億円を占め、526ヵ所を管理している。オクタビア・ヒルら3人の有志が1895年に設立し、資本主義がもたらす貧困や劣悪な都市環境を改善する社会改良運動の一つだった。過密都市の住民に健康的な空気を吸う機会を与えようと郊外の邸宅に「遠足」したのがそもそもの始まりだ。頴原さんは「日本の景観法は、新しい建築物などの規制はできても、既存の古い建物の取り壊しを防ぐことが規制できない」と日本の法制度の問題点を指摘した。

●洋館をナショナル・トラスト運動で保存―清水彬久さん

ナショナル・トラストを日本で実現させようと、2000年に設立されたのが「認定特定非営利活動法人アメニティ2000協会」（会員389人）である。清水さんによると、2002年から3年かけ阪神間のモダニズム建築560件を調査するとすでに約4分の1が消失していたという。神戸市東灘区の「旧乾邸」（1936年築）は本格的な保存の取り組みの一つである。大阪綿業会館を設計した渡辺節による約720㎡の2階建ての建物だが、相続税として国に物納され、競売される運命にあった。時価は約10億円。そこで同協会は2003年5月、神戸市に保存を求める要望書を提出するとともに、ボランティアを動員して市民に公開するための活動を始めた。5年半の間に59回（延109日）公開され、来場者1万2725人を集めた。その結果、2009年1月、国と神戸市が市指定文化財として保存を決定し、現在は、神戸市が購入して保存管理をしている。

協会の買収第1号は「ヴォーリズ六甲山荘（旧小寺山荘）」（ヴォーリズ建築事務所、1934年築）である。甲南女子学園の校舎にされていたが、3年間の交渉の末、2005年7月に2500万円で買収に合意。2008年3月に売買が成立した。しかし、問題は資金だった。わずかな協会の積立金に、会員や一般の募金、ナショナル・トラスト基金債の発行で賄った。歴史的建造物を宿泊施設にしている英国の民間団体「ランドマーク・トラスト」（1965年設立）に倣って六甲山荘は宿泊可能だという。

●住民参加による集落単位の景観計画―西山恵三さん

県建築課長などを歴任した西山さんは県内における「景観まちづくり」の歩みや明日香法に基づく景観保全計画などを解説した。その中で注目されたのは、明日香村の「大字ごとの景観計画」。すなわち集落単位で住民が参加し、空間計画だけではなく、行事とかマナーなどの共同体のルール、暮らし方も含めた景観づくりを目指している。

それに対し、清水さんは「阪神間の住民には共同体意識がないので、それに代わるフィールドワーク中心の教育プログラムを考えている。奈良の諸団体とも連帯していきたい」と話した。高度経済成長時代とは異なる市民の意識変化も現れているという。西山さんは「埋蔵文化財は従来、『開発を遅らせる要因』としか見られなかったが、最近は『それをどう活用するか』という意識に変わりつつある。地域社会で感度の良い人と行政マン有志が取り組んでいる」と話し、宗田さんは「若い人の大都会志向は弱まり、低所得でも地方を志向する人が増えている。そんな若者に町家を貸す活動をしたら良い」と提言した。

純洋風の帝室奈良博物館（片山東熊、1894年築、現国立博物館）が「古都奈良の景観にそぐわない」という批判を受け、それ以後、奈良の建築物は和風の外観を採るようになった。景観シンポジウムの会場となった日本聖公会奈良基督教会（宮大工大木吉太郎、1930年築）もその一つだが、内装の至る所に「十字架」がデザインされている。

奈良新聞　平成27年（2015年）2月2日

「おもてなし」景観シンポ

ありのままで

未来の奈良 魅力を探る

未来の奈良が魅力ある地域であり続けるために風景・景観保存の方向性や、まちづくりのあり方を考える「古都奈良の『おもてなし』景観シンポジウム」（奈良新聞社など後援）が1日、奈良市登大路町の日本聖公会奈良基督教会で開かれ、市民ら約100人が参加した。

奈良町の未来などを語り合ったパネル討論＝1日、奈良市登大路町の日本聖公会奈良基督教会

奈良市、奈良まちづくりセンターなど4団体でつくる実行委員会の主催。昭和5年完工の木造和風教会（登録有形文化財）を会場に、住民や行政の連携で育む「もてなし景観」について考えた。

まず、京都府立大学の宗田好史教授が「美しい景観の奈良、新たな保存と再生の時代が始まる」で基調講演。現在、国際記念物遺産会議（イコモス）国内委員会理事などを務める宗田教授は「奈良は1300年の歴史の中で拡大と縮小を上手に繰り返してきたまち。人口減少に向かうこれからの半世紀、いかに美しく縮小するかが奈良が輝き続けるポイント」と提言した。

続いてパネル討論があり、宗田教授をコーディネーターに、日本や英国の建築物保存運動を研究する、千葉大学の顕原澄子准教授▽ナショナル・トラスト精神の普及と実践に努める、アメニティ2000協会の清水彬久理事長▽明日香村企画政策課の西山恵三建築技術顧問―が意見交換。

奈良町の未来に関して、「本物を維持している住民に敬意を表する」「ありのままが素晴らしい。このまま進んでほしい」「郊外の団地より古い町家を選ぶ次世代が増えることが、真の景観保存につながる」などの意見が出された。

古都奈良の おもてなし景観シンポジウム

～グローバル化による景観保存の方向性を探る～

報　告　書

平成 27（2015）年２月

古都奈良の おもてなし景観シンポジウム実行委員会

事務局　奈良市中新屋町 2-1（奈良まちづくりセンター内）

TEL 0742-26-3476